

豊明絵草子と『とはずがたり』

—— 絵巻作者二条説試論 ——

中 村 義 雄

まえがき

本稿では次の二点について卑見を陳べ、大方の御示教を仰ぎたい。第一点は、後深草院二条の作品である『とはずがたり』の中に、数個所にわたって『豊明絵草子』の詞書と一致もしくは近似した部分が見られるという、きわめて興味深い事実を指摘し、さらに詞書には仏典を引用し踏まえた箇所があることにも言及し、第二点では、この両者に見られる密接な関係から、絵巻の詞書は『とはずがたり』の作者の晩年の作ではないか、さらに絵そのものも彼女の筆になるものではないかとの試論を提出し、あわせて十三世紀から十四世紀にかけての一連の白描やまと絵、および女筆などの問題、またそれらを生み出した環境などを解明する上の手がかりとしたい。

豊明絵草子の詞書と『とはずがたり』

前田家育徳会尊経閣文庫に襲蔵される白描の『豊明絵草子』は、今日

『豊明絵草子と』とははずがたり』

に至るも内容不明のまま、詞書冒頭の最初の二字によって『豊明絵草子』と呼ばれている。徳川美術館所蔵の逸名物語絵巻が近年『葉月物語絵巻』と名づけられたのも同様に、詞書冒頭の二字によつたものである。白描の『藤波絵草紙』も同様の呼び名であったが、この方は先年出典がわかり、『隆房卿艶詞絵』に落着いたのにくらべ、前の二者については、その内容は依然としてわからない⁽¹⁾。『豊明絵草子』の詞書は、仏語・漢語を交えた流麗な筆で世の無常を綴つたものであり、特異な作品といわねばならない⁽²⁾。おそらく、この文章は特定の主人公に関する個人的な興味に焦点を合わせた文学的な物語ではなく、「名号の外に機法なく、名号の外に往生なし」（一遍上人語録）とか、「只常に名号を唱へて極楽を願はば、必らず生るべき弥陀の御誓ひに会へり」（信生法師集）などといわれるように、六字の宝号を唱えて、ひたすらに浄土を欣求した中世の所産であり、したがって宗教的な観点に立って書かれたものと見るべきである。その意味からしても、この作品の本来的な名称をつきとめ、その出典をつかむなどということは、今日ではほとんど不可能に近いかと

思われる。むしろはじめから、絵巻の詞書として作られたものであろう。

さて、現在の詞書第一段の巻頭部分は次のごとくである。(挿図1)

豊明のよなくは淵酔舞楽に袖をつらねてあまたとし臨時調楽のおりくは
おみの「ころもにたちなれてみたらし河にかけ」をうつす年いまたみそち
にみたすして黄門」郎にあかりてあまさへ左大将をかけて朝恩」にほころの
みならず……………

ところが、『とはすがたり』巻一、文永九年(一二七二)の条に次のような
注目すべき一文がある。(本文は桂宮本叢書第十五巻、物語一による。対比をわかりやすく
した。以下同じ。)

蓬萊宮の月をもてあかんで豊明のよなくは淵酔舞楽に袖をつらねてあまた
とし臨時調楽のおりくはをみの衣にたちなれてみたらし河にかけをうつす
すてに身正二位大納言一らう氏の長者をけむす

挿図1 豊明絵草子詞書冒頭 前田育徳会蔵

ついて見られるように、一字の異同もなく全くの同文であることはき
わめて興味深い事実といわなければならない。この両者の一致はいった
いなにを物語るものであろうか。『とはすがたり』ではこの前後は全く
関係がないだけに、余計奇異の感を抱かせる。『とはすがたり』の右の
文は、二条の父大納言中院雅忠が、たびたび大宮院や新院に対して、出
家の暇を乞うたが許されず、重ねて大納言源定実を通じて新院へ出家を
願いだした、その切々たる文章の一部である。しかしこの度も「重ねて叶
ふまじき由」を仰せられ、ついに許されなかった。落胆した父大納言は
五月十四日夜の大谷での念仏談義のころから健康もすぐれず、七月二十
七日には後深草院が見舞のために臨幸され、涙の別離をされる。そして
八月二日二条着帯の日は小康を保ったが、その夜父は母亡き二条に対し
てしみじみと語りかけたのち、三日の辰の始めに「何とならんずらむ
は」といとも果てず、五十歳の生涯を閉じたのである。この時彼女は十
五歳だった。この父娘永遠の別離は、二歳で母を失った彼女にとっては
終生忘れがたい思い出となったことであろう。何行かにわたって両者の
間に共通する同文は、上掲の一箇所だけであるが、このほかにも、近似
している文がかなり多く見られることは、両者の間になんらかの関連性
があることを示唆するものである。以下その各々について例示してみよ
う。

同じく詞書第二段に、

……………家につたへたる宝物世にきこえたる名馬とも霊仏霊社へたてまつ
れり

とあるところは、同じく『とはすがたり』巻四、正応二年(一二八九)

挿図2 『とはずがたり』桂宮本

の条に、

………家いへにつたへたる宝世たからよにきこえある名馬なままで靈社れいしや靈仏れいぶつにたてまつる

という文に対比できる。これは二条が都を遠く離れた鎌倉の地で病床に臥し、一時は危篤状態にもなったりして心細い思いをした時、これが以前だったらそれほどの病気でなくても、家宝や名馬までも靈社靈仏に奉って、平癒祈願をしてくれたのに、今では神仏に祈ってくれる人もいないと、わが身の変転を述べた箇所である。右の近似は全くの偶然とはいきれないであろう。さらに詞書第一段の、

………天子てんしに心をかけ禁中きんちゆうにましら(4)はせむことを思かしつかせける人のむすめを(5)えたり

は同書卷二、建治三年(一二七七)の条の、

………天子てんしに心をかけ禁中きんちゆうにましら(4)は(筆者注「ハ」誤りナラン)せんことをおもひかしくよ(5)しきくも………

豊明絵草子と『とはずがたり』

と表現がきわめて類似していることも見落せない。これは二条の生んだ女兒について述べたもので、雪の曙(西園寺実兼)に伴われて去ったわが娘に久々で会うのだが、今は北の方の実子同様に育てられ、ゆくゆくは禁中にと大事にされていると聞いた彼女は、深い感慨に浸りながらも、今はもう「人の宝たからの玉たまなれば」と思うのであった。また、詞書第三段に、

………三種さんしゆの愛あいに心をとめて懺悔ざんげのおもひにひるかへ(1)らす知識ちしきするむるにたよりをうしなひ(2)教化けくわの詞ことばにみちをまとへり
とあるのは、同書卷一、文永九年の条の、
………三種さんしゆの愛あいに心をとめて懺悔ざんげのこと葉はに道みちをまとはしてつゐに教化けくわのこと葉はにひるかへし給ふ御ごけしきなくて………

ときわめて近似した表現である。しかもこのしばらく後に上掲の「豊明のよなくは……」があるのも注目されるところである。この箇所は、二条の十五歳にあたる文永九年二月十七日の朝、後嵯峨法皇のご容態が悪化し、危篤状態になられた折のことで、善知識として経海僧正と往生院の長老が参上し、あれこれお念仏をお勧め申しあげ、「今生にても十善の床ゆかを踏ふんで、百官ひやくくわんにいつかれましますば、黄泉路よみぢ、未来みらいも頼たのみあり。早く上品上生の台うへなうつに移りましゝて、かへりて娑婆しゃはの旧里きうりに留とどめ給ひし衆生しゆじやうも導みちびきましますませ」など、さまざまにすかしたり、教化申しあげたが、法皇は現世への強い愛執を断ち切ることが出来ないまま、終に同日酉の時に御年五十三歳をもって崩御されたことを書き記した条である。

また詞書第四段の、

………三界無安猶如火宅一夜のとまる(1)へき心地せず
は同書卷四、正応五年(一二九二)の

……三界無安猶如火宅一夜とまるへき身にしあらねとも
に對比することができるし、詞書第一段の、

……有為「無常のなさけなきことほり……

は同書卷五、嘉元三年（一二三〇五）の

……有為無常のなさけなきならひ……

に、また詞書第二段の

……陰陽医療の道々は「もるゝすくなく……

は同書卷四、正応二年の

……陰陽医道のもるゝはなく……

に、詞書第六段の

……つらく「いにしへをかへり見れば……

は同書卷四、正応二年の

……つらくいにしへをかへりみれば……

と全く同文であり、詞書第四段には「つらくこのことを案するに……」
という例も見られる。また詞書第二段の

日かすはつもれともしるしなし

は同書卷二、

日かすはつもれとも神にもいのらす……

に、詞書第一段の

……公事につかふるおりくは

は同書卷一、文永九年の

……公事につかうるに物うからす

に、また詞書第一段の

……年いまたみそちにみたすして……

は同書卷四、正応五年の

……いまた四そちにたにみち侍らねは……

に、それぞれ対比できよう。これらの例もかなり共通した表現と見てよ

いであろう。次は直接関係云々というような、はっきりしたものはな

く、雰囲気的なものではあるが、詞書第一段の

……秋は野「もせのむしをまかきにうつして……

は同書卷四、正応五年の

……もみちの秋は野もせのむしの霜にかれゆくこゑをわか身のうへとかな

しみつ……

挿図3 豊明絵草子 絵第一段部分 前田育徳会蔵

および同書卷
五、嘉元二年の
……まかき
のむしの声
くは涙こと
ふとかなし
くて
に、また詞書第
四段
……霓裳羽
衣の舞たとへ
とするにあ
か「さりしす

かたいたつらに東岱の雲とのほり」ぬるありさまむけにおしみ所なく……
は同書卷一、文永九年の

……東岱前後のならひはしめぬ事なからいとあはれ也

および同書卷五、嘉元元年の

……寛裳羽衣の舞の姿とかや聞くもなつかし

に、また詞書第五段

……あはれをそふる」さるのこゑ行人のたもとならねとしほりも」あへぬ
おりふし……

は同書卷四、正応二年の

……うしろの山にやさるのこゑのきこゆるもはらわたをたつ心ちして……
に類似の表現が見出だされる。もっとも、あとの指摘されているように、『和漢朗詠集』卷下、雑に収められた白樂天の詩「猿過巫陽始断腸」に拠つたものとすべきであろうが、それにしても詞書とは全く無関係として捨てきれないようにも思われる。

次はごく部分的な類似なので、両者の共通性を指摘するには余りにも短かすぎ、むしろ用語の共通ともいふべきものであるが、気づいたものを以下に列挙してみると、詞書第二段の「やまふのゆかにふしたり」と同書卷四の「やまひのゆかにふして」、詞書第四段の「五句をすくすへきよしをいふにも」と同書卷一の「五句すきはまいるへきよしおほせあれとも」、詞書第一段の「朝恩にはほころのみならず」と同書卷四の「朝恩をかふりてあまたのとし月をへしかは」、詞書第六段の「生死のちりにおかされにければ」と同書卷四の「生死のちりに身をすて」、詞書第五段「愛別のなさけなさなれば」と同書卷五の「うたてき愛別なるや」、

豊明絵草子と『はずがたり』

詞書第五段の「かの墳墓のかたはらにあむしちをむすひて」と同書卷三の「二あるあんしちのひんかしなるをてんして」、詞書第六段の「峯のあらしにたくひて」と同書卷四の「峯のあらしのはけしきにも」、詞書第二段の「金銀珠玉」と同書卷四の「金銀金玉」、詞書第四段の「こゝろもしらぬみとりこの」、同六段「あさゆふあいせしみとりこも」と同書卷五の「心くるしきみとり子を」などがある。しかしこれらの例になると、両者の間に積極的な関係を認めるといふよりも、表現における慣用的類似性といふべきものに過ぎないともいえようが、最初に掲げた冒頭の一文だけは決定的であり、そのあとの例に見られる近似も、たんなる偶然とは考えがたく、両者の密接な関連を否定し去ることはできない。この場合別人

挿図4 隆房卿艶詞絵 絵第二段部分赤外線写真 大阪 浅田長平氏蔵

が同書の一部分をそのまま、もしくは表現をなぞって雰囲氣的な面に至るまで引用あるいは活用したものと一応は考えられる。『増鏡』などは本書を「無遠慮に寧ろ露骨と見られる程に利用して居る」⁽⁷⁾のである。重要な資料と見なされている。こうした例もあるので、この場合も別人が本書によって（もちろん全体から見ればきわめてわずかではあるが）、本絵巻の詞書を作ったといえないこともない。「豊明……」の例のように、両者が全くの同文であるということは、むしろ別人であることの証拠だとする見方も可能かもしれない。しかし『増鏡』の場合は、あたかも『栄花物語』の初花巻における『紫式部日記』のごとく、史実的な内容に関するものであり、その結果として表現の類似にまで及んだものであるが、本絵巻の場合は質的にも違っており、もしも別人が詞書を作ったとすれば、いったい如何なる理由から各巻に散在するごくわずかな部分だけを、わざわざこのような形で採り入れたのか、しかも仏教談話に共通する仏教用語の慣用的使用といった範囲をはるかに越えたものであるだけに疑問が残る。むしろ同一作者と考える方が自然ではないであろうか。両者に共通した同一もしくは類似の表現は、一方を別人による模倣とみるよりも、作者における個性的な叙述の傾向、筆癖などによるものと解すべきではなからうか。⁽⁸⁾これとても推定の域を出ず、全くの試論ではあるが、本絵巻の詞書を二条の作と見たいのである。

詞書と経典

一方、詞書には内容の性質上、仏語が多く用いられ、また仏典からの引用もかなり見られるので、次にこれらの点についてながめてみよう。

詞書第三段に

……しかれとも知識こと葉を」のこさす種々に安慰してすゝめて」念仏せしむるに心をはけまして十念」は具足しぬ罪五逆にいたらさりしかは」いはむや見金蓮花猶如日輪の説虚妄なら」されはさためて下品三生のうてなには」のそみをやとけぬらむかし

とあるのは、『観無量寿経』〈散善義 下下品〉をふまえたもので、念仏の広大無辺な功德について述べたくだりである。すなわち、

仏告阿難。及韋提希。下品下生者。或有衆生。作不善業。五逆十惡。具諸不善。如此愚人。以惡業故。應墮惡道。經歴多劫。受苦無窮。如臨命終時。遇善知識。種種安慰。為說妙法。教令念仏。此人苦逼。不違念仏。善友告言。汝若不念者。應稱無量壽仏。如是至心。令声不絕。具足十念。⁽¹⁰⁾稱南無阿彌陀仏。稱仏名故。於念念中。除八十億劫。生死之罪。命終之時。見金蓮華。猶如日輪。住其人前。如一念頃。即得往生。極樂世界。於蓮華中。滿十二大劫。蓮華方開。觀世音。大勢至。以三大悲音聲。為其広説。諸法真相。除滅罪法。聞已觀喜。應時即發菩提之心。是名下品下生者。是名下輩生想。名第十六觀。

とあるのがそれである。「知識こと葉をのこさす種々に安慰して念仏せしむるに」の部分は、「遇善知識種種安慰……令念仏上」の箇所であり、「罪五逆」は「五逆……」を指し、「見金蓮花……」は原典をそのまま引いている。善導大師の『観経疏』散善義に「明臨終正念即有金華來応」とあり、右の詞書の一文は、まさしく『観無量寿経』を下敷きにして作られたものであることがわかる。（見金蓮花猶如日輪」の典故については田村晃祐氏の御教示に与った。記して謝意を表する。）

また、詞書第六段に、

……他力の舟にのりて本願の海にうかはむと」思身は愚鈍の凡夫なりといへとも今は念」仏の行者たりなんそ分陀利花にことならむ」南無観世音大勢至ねかはくは勝友となりて」生諸仏家の本懐をとけしめたまへとあるのもまた、同経卷末に近く、

……若念仏者。当レ知此人。是人中。分陀利華。⁽¹¹⁾ 観世音菩薩。大勢至菩薩。為二其勝友。当_下坐_二道場。生_レ諸_レ仏家_上。

とあるのをふまえたものである。この箇所は、阿難が釈尊にこの経の要点を質問したのに対する答えの一部であり、本経の最も主要な眼目ともいふべきものである。また詞書第三段の

……ひつしの「あゆみやうくちかつき……

はいうまでもなく『摩訶摩耶經』の

譬如旃羅馱羊至屠所⁽¹³⁾步步近_レ死地。人命疾_レ於是。

によつたものである。さらに、詞書第四段の

……三界無安猶如火宅一夜のとまる」へき心地せず衆苦充滿甚可怖畏……

は『妙法蓮華經』へ譬喩品第三の偈の一部

三界無_レ安。 猶如火宅。

衆苦充滿。 甚可_レ怖畏。

からの引用であり、いわゆる法華經七論の第一である三車火宅の物語に ついての箇所である。なお『とはすがたり』には、上掲の卷四の一文の ほか、卷二にも「三界無安猶如火宅とくちすさみて出給しけしきこそ」⁽¹⁴⁾ 「三界無安猶如火宅といひ給ける人のおもかけうかむ心ちして」と見え、

豊明絵草子と『とはすがたり』

卷三には「三界の家を出て」とある。このように見てくると、詞書の 作者がひろく仏典にも通暁していて、仏教についても豊かな知識の持ち 主であるのみならず、経文の一部をたくみに地の文に織りこんでいる点 に、なみなみならぬ筆の冴えをうかがわせる。いかにも突飛なようであ るが、絵巻作者二条説の蓋然性は高いと考えるのである。以下その理由 とするところをいくつか挙げてみたい。

詞書作者二条説の周辺

まずこの絵巻の詞書の文章が文学的にすぐれたものであり、ひきしま った対句的表現、韻律的で流麗な文体、かげりのある叙述など、みごと なものと思われることである。しかもそれは仏教説話に共通して見られ る、あの乾いた淡々とした叙述ではなく、へものあはれをしっかりと にじませて物語的な情趣をたたえており、物語を愛読した女性の筆を 思わせるのに充分である。事実二条は『源氏物語』のたいへんな愛読者 であり、『とはすがたり』には随处にその影響が見られる。

ここで少しく『とはすがたり』について述べておきたい。図書寮(現 書陵部)に襲蔵される桂宮本『とはすがたり』の存在をはじめて世に紹 介されたのは山岸徳平博士で、昭和十五年のことであった。⁽¹⁵⁾ そして十年 後の昭和二十五年同博士によって桂宮本叢書(養徳社)の一冊として刊 行され、一躍注目を浴びることとなり、さらに昭和三十二年には『むぐ ら』を添えて再刊された。かくして本書に関する研究も進み、これにつ いての論文も数多く発表されている。昭和四十一年に至って、四月には 富倉徳次郎博士を中心とする口語訳、原文併載の『とはすがたり』(筑

摩書房)が出版され、一般にも広く読めるようになった。続いて七月には中田祝夫博士監修による呉竹同文会の『とはすがたり全釈』(風間書房)が、さらに十一月には次田香澄博士校註の『とはすがたり』(朝日新聞社)が日本古典全書の一冊として刊行されるなど、本書はにわかに関文学界の寵児になったかの観がある⁽¹⁶⁾。しかし、伝本が一本しか存在しないという天下の孤本であるために、本文制定には困難な点も多く、さらに今後の研究にまたねばならない。筆者はかつて叢書本を一読した当時、『豊明絵草子』の詞書との間に、何箇所かにわたって類似の表現があることを見出だしてメモをとっておいたのであるが、迂濶にもかんじんの「豊明」の条が両者同文であることを今日まで見落していた。たまたま昨春富倉博士本の頁を繰っていてこの事実気付き、両者の関連がはっきりしたので、一応私見をまとめたしだいである。ところで、『とはすがたり』は五巻よりなる日記で、文永八年(一二七二)作者十四歳の正月一日から筆を起こし、嘉元四年(一一三〇六)四十九歳の七月十六日ごろまでの記事で終わっている。巻三までは宮廷生活における若き日の愛欲生活、巻四・巻五は尼となって諸国を遍歴した旅生活が描かれている。なかには、足摺岬の語源説話(巻五)や松浦佐用姫伝説の望夫石のこと(巻三)なども見られる。本書の成立について玉井幸助博士は、延慶年間ぐらゐに書き終えたのであらうと見ておられる⁽¹⁷⁾。延慶三年(一一三一〇)には二条は五十三歳になっていた⁽¹⁸⁾。なお『とはすがたり』には書写者の注記として、

これよりのこりをば、かたなにてやられて候。おぼつかなく、いかなる事にてかとうかしく候。(巻四)

本のまゝ、こゝより紙をきられて候。おぼつかなし。紙のきれたる所よりうつつ。

こゝより又かたなにてきりとられ候。返す／＼おぼつかなし。

こゝより又かたなしてきられて候。おぼつかなく、いかなることにかとおぼえて候。(巻五)

など、切り取られた部分が何箇所もあり、その紙数、内容、切り取られた理由などいっさい不明であるが、あるいは切り取られて散佚した部分にも、さらに詞書の文と一致もしくは近似した箇所があったかもしれない。

二条は西行の境涯に強く惹かれ、女の身ながらも後年出家して漂泊の旅に出るのであるが、その彼女の脳裡に鮮明な映像を焼き付けたのは、その昔まだあどけない少女のころに見た『西行物語絵』であったと述懐していることは注目される。すなわち、同書巻一に、

九つの歳にや、西行が修行の記といふ絵を見しに、片方に深き山を描きて、前には河の流れを描きて、花の散りかゝるに、居て詠むるとて、

風吹けば花の白浪岩越えて渡りわずらふ山川の水

と詠みたるを書きたるを見しより、羨しく、難行苦行は叶はずとも、我も世を棄てて、足に委せて行きつゝ、花の本、露の情をも慕ひ、紅葉の秋の散る恨みをも陳べて、かゝる修行の記を書き記して、亡からん後の形見にもせばやと思ひしを、未生の愁へ、逃れざれば、親に従ひて目を重ね、君に仕へても今日まで憂き世に過ぎつるも心の外に、など思ふより、憂き世を厭ふ心のみ深くなり行くに……

と見えている。そしてさらに巻五の巻末に近く、

……さても宿願の行末、如何なり行かんと覚束なく、年月の心の信も、さ

すが空しからずやと思ひ續けて、身の有様を独り思ひ居たるも飽かず覚え侍る上、修行の志も、西行が修行の式、羨しく覚えてこそ、思ひ立ちしかば、その思ひを空しくなさじばかりに、斯様の徒言を、続け置き侍るこそ。後の形見とまではおぼえ侍らぬ。⁽¹⁹⁾

同書にはまた、例の当麻曼荼羅についての記載も見られることは興味深い。すなわち巻四に、三十二歳の正応三年十月の末ごろ、中宮寺から当麻寺へ参詣した彼女は、

法隆寺より当麻へ参りたれば、横佩の大臣の女、「生身の如来を拝み参らせん」と誓ひてけるに、尼一人来りて「十反の蓮の茎を賜りて、極楽の莊嚴織りて見せ参らせん」とて、請ひて、糸を引きて、染の井戸の水に濯げば、この糸五色に染まりけるをぞ認めたる。所へ女房一人来りて、油を乞ひつゝ、亥の時より寅の時に、織り出だして、帰り給ふを、房主「さて、如何にしてか、又会ひ奉るべき」と言ふに、

往昔迦葉説法所 今來法基作仏事
郷戀西方故我来 一入是場永離苦

とて、西方を指して飛び去り給ひぬ、と書き伝へたるも、有難く尊し。

と書きとめているが、おそらくこれも寺に秘蔵される絵巻かなにかを見てのことだったのであるまいか。⁽²⁰⁾ なお「たいま」(当麻)を「たへま」と呼んでいるのは慣用音として興味深い。『西行物語絵』といい、『当麻曼荼羅』といい、詞書の問題の背景を考える上に重要な事実と思われる。

ところで、二条の出自である中院家には文藻豊かな人が多かった。すなわち、二条の父雅忠の祖父通親(一一四九～一二〇二)は土御門内大臣

と呼ばれ、歌合・歌会などにも出詠し、和歌所寄人となり、『千載集』以下に二十九首入り、『高倉院殿島御幸記』の作者でもある。さらに雅忠の伯父通具(一一七一～一二二七)は和歌所寄人、『新古今集』の撰者であり、学芸の才に恵まれ、雅忠の従姉妹に当たたる後嵯峨院大納言典侍は大納言局ともいわれ、『統後撰集』以下に十三首入り、歌人として活躍し、家集に『秋夢集』一卷(桂宮本叢書私家集第十卷所収)がある。二条自身も『とはすがたり』の中で、夢枕に立った父が「……具平親王よりこの方、家久しくなるといへども、和歌の浦波絶えせず」などといひ残して立ちぎわに、

なをもたゞ書きとめてみよ藻塩草人をも分かず情ある世に

と詠じて去ると見て目を覚ましたことを記し、これ以後の彼女は、特に和歌の道をたしなむ心も深くなり、人麿の墓に七日間通夜しているのである。⁽²¹⁾ (巻五)

次に『とはすがたり』の作者の一生とその境遇についてである。彼女は文永八年(一二七二)正月、十四歳のころから後深草院の寵愛を受けて皇子を生むが、わずかに二歳で夭折し、将来にかけた華やかな後宮女性としての希望も空しく破れる。十五歳で父を失ってからは、上皇との愛の日々もいよいよはげしさを加えるが、一方では「雪の曙」「有明の月」(有明の阿闍梨)などとも交渉をもつ。しかし彼女はその実名はもとより、記事についても、だれとはっきりわからぬように、気を配って書いているのであるが、「雪の曙」は玉井博士により西園寺実兼、「有明の月」は松本寧至氏により性助法親王と推定されている。彼女は美貌だったようである。こうして愛欲生活に明け暮れた若き日とはうって変わり、三

十代以後は尼婆となり、西行を敬慕しつつ漂泊の旅に出て、「げに憂きはなべての習ひとも知りながら」「無常はつねの習ひなれども」などと、流転してやまぬ人の世の相を綴っているのである。後深草上皇とのあいだの地上的な愛欲の焰も、いろいろなことがからんでやがてはおとろえ、ついに宮廷退出を余儀なくされ、十年あまりの歳月が流れていた。上皇（すでに法皇）が六十二歳で崩御されたことを聞き、御葬送にかけつけ、身なりもかまわず、去りゆく柩の列に裸足で追いつがる二条の姿は劇的である。流転の歯車の軌りとともに、遠い彼方に消えてゆく現世のはかなさを、数奇な運命の星のもとに悲劇的な一生をたどった彼女自身の体験を通して、晩年このような無常を悟らせる絵巻の詞書を作らせたとは見られないであろうか。『とはすがたり』のなかで、死・喪・無常などを記した部分のすばらしい筆は、本書の特色の一つともいえようが、これらの箇所と絵巻の詞書とのあいだには、心情表現の上にながら共通するものがあることを否定することはできない。なかでも次の一文は、無常を語る彼女の言葉のなかでは、ひととき光彩を放っている。これは正応三年（一二九〇）二月十日過ぎのころ、善光寺に参詣した彼女が、大勢の同行者と別れて、善光寺にしばらく参籠したいと申し出た時に、ただ一人残して立ち去ることを案じた一行の人々に述べた言葉である。

中有の旅の空には誰か伴ふべき。生ぜし折も一人来たりき。去りて行かむ折も又然なり。相会ふ物は必ず別れ、生ずる物は死に必ず至る。桃花粧いゝみじと雖も、終には根に帰る。紅葉は千入の色を尽して盛りありと雖も、風を待ちて秋の色久しからず。名残を慕ふは一旦の情なり。（巻四）

この一見さりげない表現のなかににじみわたるしみじみとした述懐こそは、『豊明絵草子』の主題につながるものではなからうか。しかもこの文の少し手前の、同二年の歳末に、三十二歳の過ぎ来し方を回顧して、

つらく古を顧みれば、二歳の年母には別れければ、その面影も知らず。やう／＼人となりて、四になりし長月廿日余りにや、仙洞に知られ奉りて、御簡の列に連りてよりこの方、じけなく君の恩眷を承りて、身を立つるはかりごとをも知り、朝恩をも被りて、数多の年月を経しかば、一門の光ともなりもやすると、心の内のあらましも、などか思ひ寄らざるべきなれども、捨てし無為に入る習ひ、定まれる世の理なれば、妻子珍宝及王位、臨命終時不随者、思ひ捨てにし憂き世ぞかしと思へども、慣れ来し宮の内も恋しく、折々の御情も忘れ奉らねば、事の便りには、先づ言問ふ袖の涙のみぞ色深く侍。

と記す一文は、思い切つて捨てたはずの宮中生活折々の思い出が幻影となつて去来し、俗界の絆として彼女を煩惱の深淵に沈めるのである。そうした女性ゆえのへたゆたひが、行ない澄ました名僧善知識の法語的な枯淡さとはおのずから違った潤いを読む者に与え、そのことがまた文学性を豊かに湛えていることにもなるのである。『豊明絵草子』では、中納言に上り左大将をかけた才色兼備の貴公子と、楊貴妃のような美女との何不足ない愛情生活が、十年あまりで容赦なく襲う無常の嵐に奪い去られ、中納言は妻の死を契機に出家するという筋である。上掲の「豊明のよなく……」は、父の出家嘆願文を詞書の一部に、しかも巻頭に引用することによって、父の愛に浸つて過ごした幼き日々を、心ひそかに追憶したのではあるまいか。それは彼女にとっては夢とも思われる遠

い昔の華やかさを、世捨人となった閑寂な現在に結ぶ幻の糸だったのであろう。また、「三種の愛に心をとめて……」の一文も、既述のように、後嵯峨法皇のご臨終を頭に浮かべ、二重写しとして転用したのではなからうか。両者のあいだには、男性と女性との違いや身分・立場の差こそあるが、共通したものがあつたことを思わせるのである。なお、「天子に心をかけ……」の条、『とはすがたり』に見える実子については、永福門院説、昭訓門院説があるが、これまた詞書に関連してモデル論としても興味を惹かれるところである。

二条は『とはすがたり』五巻を執筆することによって、愛に生き、歌に生きた若き日のわが身を、後半生になって、旅を通して悟った人間の弱さに重ね合わせないではいられなかつたのであろう。ここで勝手な想像が許されるならば、『とはすがたり』完成後、二条はさらに筆を執り、苦闘の末によく到達した枯淡の境地に立って、煩雑な人間模様が織りなす愛欲生活の空しさを、人生の定理とでもいうような、一般論の形にまで還元し、無常を主旋律とするこのような絵巻の詞書に作り上げたのではなからうか。したがって、もしもそうであるとすれば、詞書の一語一文には、彼女の過去の忘れぬ思い出や見聞経験が、人知れず秘められていて、それが本書と同文もしくは近似した形をとつたものと見たいのである。

『とはすがたり』の文章に見られる特色の一つとして、水川喜夫氏は、漢籍、仏典の引用が多く、それらが引用を越えて地の文にまでなつている点に注意しておられるが、このことは詞書においても、上掲のいくつかの例に見られるごとく、全く同様の特色ともいべきものである

る。漢籍についての素養、仏典に対する深い知識は両者に共通して見られるところである。さらに詞書のなから二、三掲げてみよう。(読みやすのために一部を漢字にかえ、その箇所にはルビを附した。)

春は緑に霞むより、晴の空に落花を惜しみて歌を詠め、秋は野面の虫を籠に移して、管絃糸竹の音に合せてあはれを添へ、総て時につけて心に足らぬことなく、身に憂へたる色なし。(詞書第一段)

春霞飛花の遊、秋風明月の戲、蕭笛琴瑟の調、流泉啄木の曲、一として臨終々焉の夕にはしなれても要なかりけり。(詞書第四段)

時光漸く影映りて、五更の空に及ぶ。半月光少くして草の局も寂し。落葉風に従ひて方丈の柩を叩くに、妄想の夢驚かれて静かに往事を憶へば……
…(詞書第六段)

あれだけの作品を書き残した二条なら、このような詞書は当然書けたはずである。

さらに具体的な点では、両者に『観無量寿經』よりの引用が見られることも注目される。もちろんこの事実が直ちに両者を同一作者とする決り手にはならないにしても、仏典の引用の仕方とともに無視することはできない。詞書における仏典の引用については、既述したとき箇所を挙げるができるが、『とはすがたり』では、巻五(乾元元年)に、
本地弥陀如来と申せば、光明遍照、十方世界、念仏衆生、撰取不捨、漏らさず導き給へと思ふにも……

と記されている。次に両者に共通するものとして、楊貴妃および長恨歌に対する関心を挙げる事ができよう。すなわち詞書には、「かの揚玄琰のむすめをはしめてえ給へりけむ皇帝の御心地にもすきたり」(第一段)「霓裳羽衣の舞たとへとするにあかさりすかた」(第四段)とあり、

同書には「三千の寵愛もみな尽したる心地を思ふ」(巻二)「比翼の契」(同上)「大方、方士が術ならでは、尋ね出で難く候ひしを、蓬萊の山にてこそなど……」(巻二)「唐の玄宗の楊貴妃が奏しける、霓裳羽衣の舞の姿とかや……これや楊妃の姿ならむ……」(巻五)と見えている。詞書もまた本書と同一作者を思わせる筆づかいではなからうか⁽²⁴⁾。

二条の画技

以上、内部徴証^{インテリナル・エヴィデンス}というにはあまりにも粗雑ながら、絵巻の詞書の作者に二条を擬する拙論の根拠を挙げたのであるが、なおもう一つ見逃すことの出来ない記事を附け加えたい。それは同書巻五の

……鎌倉にある親しき者として、広沢の与三入道といふ者、熊野参りのついでに下るとて、家の中騒ぎ、村郡の営みなり。絹障子を張りて、絵を描きたがりし時に、なにと思ひ分くこともなく、「絵具だにあらば、描きなまし」と申したりしかば、「輶^{とこ}といふ所にあり」とて、取りに走らかす。よに悔しけれども力なし。持て来たれば描きぬ。喜びて、「今はこれに落ち留まり給へ」など言ふも、おかしく聞く程に、この入道とかや来たり。大方、何とかなどもてなすに、障子の絵を見て、「ぬ中にあるべしとも覚えぬ筆なり。如何なる人の描きたるぞ」と言ふに、「これにおはしますなり」と言へば、「さだめて歌など詠み給ふらん。修行の習ひこそあれ、見参に入らん」など言ふもむつかしくて、熊野参りと聞けば、「のどかに、この度の下向に」など、言ひ粉ら^まかして立ちぬ。

という一文である。二条が四十五歳の乾元元年(一三〇二)十一月の末、備後の国和知の土豪の家に、二、三日滞在中、折しも鎌倉から、伯父に当たり、しかもこの地の地頭でもある広沢の与三入道⁽²⁵⁾という者が立ち寄

るといので、家を挙げ部落を挙げての大騒ぎとなり、障子も張ったが、絵を描きたがっていたのを、彼女がちょっと口をすべらせたところから、描かされる羽目になったといいながらも、堂々と彩管を揮っているのである。しかも後日来訪してこれを見た入道が、その出来栄を「田舎にあるべしとも覚えぬ筆なり。如何なる人の描きたるぞ」と賞している。この事実については、すでに家永三郎博士が本条を重要な絵画史料として指摘され、「障子絵といふものは本格的な画技であつて、普通は専門の絵師のしごとなのであるが、二条は能くこれを書きこなすだけの技能をもつてゐたのであつた。」と述べておられる⁽²⁶⁾。その後、二条は江田に住む和知の主の兄に招かれてそちらへ出かけたが、このことを怒った弟は、兄に対してすさまじい争いを起こし、彼女は危い立場に立たされるといふ一幕もあり、入道のとりなしで落着するが、その入道は彼女に「能は仇なる方もありけり」といつている。これも和知の主が、絵の上手な彼女を、下人として長く家に召使うつもりだったからであつた。しかもこの入道とは、かつて鎌倉の飯沼の左衛門の所で催された連歌の席に同座したことがわかり、たがいに驚き合ったと記している。それはともかくとして、この事実は本絵巻のみならず、鎌倉期以後の白描画などを考える上にきわめて興味深く、また重要な示唆を与えるものである。かくて彼女は、詞書も絵も独りで制作しうる能力を充分に備えていたことは明白である。このほか、巻二にも、月光をうけて青々とした梢の中に浮かぶ遅桜を背景に佇む鹿などの風情を、彼女は「絵に描きとめまほしきに」と記しているのである。阿仏尼は『庭の訓』(別名「乳母の文」)の中で、宮中に出仕している娘紀内侍に、

又、絵は、わざと立てたる御能までこそ候はずとも、人の貌かたちなど美しく描き習ひて、物語絵など詞めづらしく作り出て持たせおはし候へ。大方、絵とても、頑かたくならぬ程に描き習ひて、御屏風の墨書、色紙なども、描かせおはしましたらむこそよき御事にて候へども、それまで及び候はずばの事にて候。(広本) (略本では「絵は取立てたる御能にては候まじく候へども、人の形美しく描き習ひて、御徒然ならむ折には、物語絵など遊ばし候へ」とある。以上築瀬一雄博士編「校註阿仏尼全集」による)

と訓え論している。二条がこうした芸術的天分にきわめて恵まれた女性であったことは、豊富な有識関係語彙、詳細な雅楽曲目名などとも相俟つて、『とはずがたり』の随処にうかがわれるところである。このように見てくると、『豊明絵草子』なる絵巻は、詞書も絵もともに二条の作ではないか、との結論に達するのである。

白描絵には女筆と伝えられるものも多い。本絵巻の絵もまた、人物、動植物の描写をはじめ、障子絵——松にかかる藤と小柴垣、梅に柳、川に橋、月に雁の列など、屏風絵、色紙形なども繊細であり、画面にそこはかとなく漂う優しさは、線のあたりのやわらかさとともに、女性の筆を思わせる(図版V)。さらに図そのものについても、例えば、第一図は廂の間に桜の折枝を挿した瓶が置かれ(挿図3)、端近く女房が一人、御簾のはずれから庭を眺めているところであるが、このような場面を描くこと自体が、女性の手になることを示唆するものとはいえないであろうか。それには次の二つの事実が、有力な傍証とは見られないであろうか。その一つは、桜の花の折り枝を瓶に挿して觀賞し、これを前にして歌を詠んだという記述は、平安時代の歌集などにはかなり多く見られるところであるが、これら所見のほとんどすべてが、女性の私家集もしくは

『豊明絵草子』とはずがたり』

は女性に関する事実であるということである。管見では『古今集』春上、藤原良房〔染殿の后〕(大鏡、良房・宴曲集一、花にも見える)、『他撰本貫之集』〔敦慶の式部卿の女〕(後撰集春下、拾遺集雜春にも重出する)、『惟成弁集』『枕草子』四段・二十三段、『大斎院前御集』『紫式部集』『源氏物語』へ胡蝶『伊勢大輔集』『馬内侍集』『四条宮歌合仮名日記』『健寿御前日記』『粟田口別当入道集』〔宮の御方〕などに見えている。もう一つは『隆房卿艶詞絵』の第二段の図である。それは「坪庭を隔てた別棟に簾をおろし、ひそやかに籠もる一女性の姿。前には紙が上げられ手ずから花の絵を描くかとも見える。傍らにはやはり絵をかけた草子が置かれ、巻いた紙の束も沢山に積まれている⁽²⁸⁾」場面である(挿図4)。建物の向側には満開の梅が描かれているので、花の絵は梅とみられるにしても、女性が花の絵を描いているところが図示されているのは興味深い。秋山光和氏はこの女性を小督に比定しておられる。そこでもしも『豊明絵草子』の絵もまた二条の筆になるものであるといえるならば、白描絵の作例およびその背景について考察する上に、一つの有力な補助線となるであろう。

なお、二条の母後深草典侍は隆親の女であり、隆親の祖父は冷泉大納言藤原隆房であることは、たんなる偶然かもしれないが、主題的な意味で『隆房卿艶詞絵』『平家公達草子』とも関連して注目されるところである。

あとがき

以上、『豊明絵草子』を『とはずがたり』およびその作者二条との関連のもとに眺めてみたのであるが、本稿ではあまりにも二条に筆をつい

やしすぎたかもしれない。この点あくまでも試論ということで寛恕ねがいたい。しかし、少くとも上述したごとく、詞書が『とはすがたり』と密接な関連をもっていることだけは動かしがたい。しかも本書の作者二条が文藻豊かであるのみならず、画技にもすぐれていたこと、彼女の一生が劇的であり、出家して旅をつづけ、身をもって無常を感得していたこと、仏典にも通じていたこと、などの諸点は、本絵巻を考える上に、きわめて有力な事実であると思われるのである。

写真掲載を許可された宮内庁書陵部、前田育徳会に対して謝意を表する。またご配慮いただいた書陵部の嗣永芳照氏にお礼を申しあげる。

注

- 1 徳川義宣氏『葉月物語絵巻』第一章(昭39・7) 田中一松・宮次男氏「藤波絵草紙」(図版解説) 美術史二八号(昭33・3) 秋山光和氏「『隆房卿艶詞絵』をめぐって—いわゆる『藤波絵草紙』の典故とその性格—」 美術研究二一五号(昭36・3) および「隆房卿艶詞絵の典故とその性格—鎌倉時代における歌絵的伝統—『平安時代世俗画の研究』第八章(昭39・3)
- 2 市古貞次博士は『中世小説の研究』第一章公家小説、5その他、二、豊明絵草子の項で、梗概のあとに「これまた筋の変化に乏しい遁世修行談であるが、四苦の一つである死、愛妻の死にあひ驕然として出離生死の念を深め、遁世するなど、この時代の出家の一つのあり方が示されてゐると思ふ。文章は簡潔にしてよく整ひ、みるべきものがある。悲恋遁世談に似てゐるが、やや異なる故に、ここにあげておく。」と述べておられる。
- 3 富倉博士訳本では「臨時の調葉の折々は…」と「りむしてうかく」に「の」を補っているが、詞書にも「の」はなく、『とはすがたり』原本と同じである。
- 4 富倉博士訳本では「典侍に心を懸け」と字を宛ててあるが、註に「一説『天子』を当てる。」と記されているように、ここは「天子」の方がよい。この場合詞書の本文「天子」の表記は有力な参考となる。(もっとも解題の中では「天子」に心をか

け」となっていて、本文とは違っている。)なお注5参照。

5 次田博士の朝日古典全書本のみは「禁中に交らひせんことを思ひ…」とするが、「い」(ひ)は「ハ」の誤りとすべきで、これも注4と同じく絵巻の詞書は有力な資料となる。

6 撰集抄一(新院ノ御墓讃州白峯ニ有レ之事)に「さひたる猿ノ声を聞に、そゝろにはらわたをたち侍り」の例もある。

7 桂宮本叢書第十五巻、物語一、山岸徳平博士解題。

8 端的な例としては『平家公達草紙』における「きよら」「きよらなり」がある。かつて筆者はこの語をもって、藤原隆房の筆癖と見なし、作者推定の一根據とした。

(『平家公達草紙と藤原隆房』美術研究二二五号) 先年中野幸一氏が、書陵部の佚名物語を平家公達草紙の一部かとされたが、(『書陵部蔵の佚名物語』巻について—『平家公達草紙』の残欠か—附、書陵部蔵『佚名草紙』翻刻、国語と国文学38・3月号)この文にも「きよらなる」(第三紙)「きよら也」(第五紙)「きよけなる」「きよらなり」(第六紙)と頻出するので、これまた隆房の作であることは間違いないであろう。隆房はよほどの語が好きだったとみえる。ついでながら『和泉式部日記』に「つれづれ」の語が頻出することはよく知られている。また阿仏尼は、わが身の境遇から『和漢朗詠集』巻下、雑の白詩「第三第四絃冷冷、夜鶴憶子籠中鳴」のなかの「夜の鶴」の語を好んで使っている。すなわち「四条局仮名諷誦」『十六夜日記』に見え、さらに『夜の鶴』(「夜鶴抄」とも)と題する歌論書もある、と

いったしいである。

9 『発心集』六八七五、上東門院女房住ニ深山ニ事、厭ニ穢土ニ欣ニ浄土ニ事ニ「下品下生の人をとくには、四重五逆を作る悪人なれども、命終の時善知識の進めにあひて……」とあり、『沙石集』十(本)(一)「浄土坊遁世の事」に「観経ノ下品下生ハ、十悪五逆ノ罪人ナレドモ、臨終ニ善知識ニアヒテ、十念トナヘテ往生セリ」とあり、『梁塵秘抄』二に「弥陀の誓ぞ頼もしき。十悪五逆の人なれど、一たび御名を唱ふれば、来迎引接疑はず」とあるなど、いずれも「観無量寿経」の経文に触れている。

10 『平清盛自筆願文』に「十念具足超中有遊西方雖下品不嫌……」とある。

11 分(芬)陀利華はブンダリーカ(Pundarika)の音訳であり、白蓮花で清浄な

の喩えである。『権中納言実材卿母集』下(桂宮本叢書)にも、

若念仏者、当知此人、これ人中の分陲利花といふ心を

まれにさく花にたとふることはやよにたくひなきにほひなるらん
と見え、さらに、

妙法蓮花も、観経の分陲利花おなしにほひといふ事を

はちす葉のたへなる色も時ありてひらくるはなのおなしにほひそ

とあるのは興味深い。彼女は前太政大臣西園寺公経の妾。白拍子の出(公卿補任)で、以前親清と交渉があったらしく、公経の死(寛元二—二四四)に際しては未婚、後の大納言二品(後深草院後宮成子)を懐妊中であつた(上掲書解題参照)。また『一遍上人語録』へ道具秘釈に「衣」と題して「南無阿弥陀仏。信此人人中分陲利華心。是即難思光仏徳也」とあり、『為盛発心集』には「釈尊猶讚驗分陲利花」とある。なお余談ながら、法印公順の『拾藻鈔』(一二九三—一三三四頃の詠作)第九には「分陲利花院前関白家新少将身まかり侍し四十九日にあたりし日、法印長舜もとへ」の詞書がある。

12 『一遍上人語録』に「観音・勢至の勝友あり」とある。

13 『源氏物語』〈浮舟〉に「羊の歩みよりも程なき心地す」『狭衣物語』二に「常よりもいと苦しうて暮れ行くは、羊の歩みの心地して」、『保元物語』〈義朝幼少弟悉失〉に「羊の歩み近づくを知らざりけるこそはかなけれ」、『撰集抄』四〈範円聖人事〉に「羊の歩、我身につもるをば不知とをほゑて」、『発心集』五、〈五九乞兒物語〉に「羊の歩屠所にちかつげば」などの例がある。

14 『無名草子』に「三界無安猶如火宅と口誦みて歩み行く程に」と本書巻二に類似した表現が見られるほか、『栄花物語』〈花山尋ぬる中納言〉に「花山院は三界の火宅を出でさせ給ひて」、『撰集抄』一〈行賀僧都〉に「三界火宅の外に出て」、『梁塵秘抄』二に「三界火宅を疾く出でむ」、『信生法師集』に「なかく三界火宅をのかれ」などの例がある。「三界火宅」は『心地観経』第四にも見える。

15 「とはすがたり覚書」国語と国文学昭15・9月号

16 『とはすがたり』に関する論文については、中田祝夫博士監修、呉竹同文会(水川喜夫・和田久・杭迫晴司・倉本光雄・落合尚郎氏共著)『とはすがたり全釈』巻末および次田香澄博士校註『とはすがたり』(日本古典全書)解説に附された参考

豊明絵草子と『とはすがたり』

文献に詳しい。なお、これ以後に発表されたもので管見に入った論考としては、吉田精一博士『「問はず語り」雑感』(中央大学国文10号、昭41・9)、長野菅一氏編、小内一明・宮本瑞夫氏担当『「とはすがたり」注解拾遺(2)巻の一』(立教大学日本文学17号、昭41・11)、富倉徳次郎博士『「とはすがたりの文学史的位相」、次田香澄博士『とはすがたり構想論』、水原一氏『「とはすがたり」を読む』、中村真一郎氏『とはすがたり』による恋愛論』、竹西寛子氏『「とはすがたり」と王朝日記』(以上五篇、文学一九六七・1月号)玉井幸助博士『「問はず語り」服飾考』(学苑昭42・1月号)、長野菅一氏『書評富倉徳次郎氏「とはすがたり」』(国語と国文学昭42・2月号)玉井幸助博士『課外講座問はず語り巻四解釈(一)』(学苑昭42・3月号)「同(二)」(同5月号連載)がある。また研究展望については井上宗雄博士の「最近における『とはすがたり』研究の展望』(国文学昭41・9月号)がある。

17 「日記文学の研究」〈問はず語り〉

18 「二条」という呼び名は、院の御所に出仕中の、十四歳から二十八歳までの期間のもので、その後三条とつけられて喚びたことが『増鏡』〈さし櫛〉に見える。

次田博士は、「二条」の小路名も久我家の嫡女としては低いので、父雅忠が後深草院に改名を申し出た点ともあわせ、著者名としては「雅忠女」と呼ぶべきであるとされる。ここでは一応通行の呼び名にしたがった。

19 本書に見える『西行物語』の記事については、白畑よし氏が触れておられ、現存の徳川・大原本と関連して検討を加えていられる。(日本絵巻物全集XI「西行物語絵巻」と当麻曼茶羅縁起について」昭33・11)

20 四句偈の二句目「こんらいほうきさんふつし」は「今、来、法、起、(喜、基)作仏事」と字を宛てたとして、この順序の偈を載せるものに『極楽変相曼茶羅』『古今著聞集』『私聚百因縁集』『一遍聖絵』があり、『当麻曼茶羅縁起絵巻』『光明寺本』では「法、基、今、来」と逆になっている。(三山進氏「鎌倉の絵巻について」第二章「鎌倉の絵巻」鎌倉国宝館記録第五集参照)

21 桂宮本叢書第十五巻『とはすがたり』解題、同第十巻『秋夢集』解題、および『和歌文学大辞典』

22 『とはすがたり全釈』解説「文章について」なおもう一つ、水川氏は同書の語法の特徴として『なま賢しく、女御をば近くを。』にや、言ひ馴らはして。』、「万見後

ま、は、嬉、し、と、も、言、ふ、べ、き、に、や、な、れ、ど、も、誰、か、告、げ、参、ら、せ、ん、も、せ、ん、な、け、れ、ば、な、ど、傍、点、部、が、一、個、の、体、言、の、よ、う、に、扱、わ、れ、た、体、言、相、当、語、句、を、指、摘、し、て、お、ら、れ、る、が、詞、書、第、五、段、に、は、「同、穴、の、契、を、た、が、へ、ぬ、に、な、ぞ、ら、へ、て」というのがある。

23 『権中納言実材卿母集』下(桂宮本)にも「光明遍照、十方世界、念仏衆生、撰取不捨」の詞書で「たのもしなあまねくてらす光にもわきておさむるみたのちかひは」という歌を詠んでおり、「尺教の哥よみ侍し中に、観無量寿経の心を」という詞書も見える。実材母については注11参照。『源氏物語』(賢木)にも「律師のいと尊き声にて、念仏衆生撰取不捨と、うちのべて行ひ給へるが」とある。

24 なお「あまたとし」の語も両者に共通して見られる。『とはすがたり』では「豊明のよなよな」の条に見えるほか、「あまたとしさすかになれしよ衣」(巻一)「あまたとしなれし形見のさよ衣」(巻五)などの歌にも見える。

25 原本「きさう」を「よさう」に訂正。松本寧至氏の考証によれば、藤原秀卿の後裔で、実方を祖とする広沢氏四世行実。將軍宗尊親王の王女の守役という。

26 「歴史資料としての日記」解釈と鑑賞29・1月号、日記文学特集 なお家永博士はさらに、二条ばかりの特技でなく、絵画の教養がもっとひろく上流婦人の教養として普及していた例として、巻二の「さても、おとしの七月に……」以下の一文(桂宮本叢書七三頁)を挙げておられる。この箇所は——二条が自分のと交換した扇は、ある人の娘が「ひた水に秋の野」を描いたものだったが、たまたまこれをご覧になった後深草院が、その扇絵の美しさに強く惹かれ、まだ見ぬこの娘への恋に、三年の間二条にあれこれときりに手引をせまられた——というもので、ちなみに、このあとにはついにこの娘を召し出されたが、院が幻滅の悲哀を感じられるくだりが続く。

27 この箇所は「卯月の未つ方の事なるに、なべて青みわたる木末の中に、遅き桜の殊更けちめ見えて、白く残りたるに、月いと明くさし出たる物から、木蔭は暗き中に、鹿の佇み、歩きたるなど、絵に描きとめまほしきに……」とある。

28 秋山光和氏「陸房卿艶詞絵の典故とその性格」——鎌倉時代における歌絵的伝統——『平安時代世俗画の研究』第八章

補 終わりに、参考までに他の文学作品の中から、詞書の文章に類似もしくは関連した箇所をいくつか挙げておく。(詞一は詞書第一段の意。以下同じ。)

詞一「豊明のよなくは……おみのころもにたちなれて」——有明の別、一「ひと、せのとよのあかりそかし、をみのしやうそくにて、めつらしかりし御よそひ」

詞一「みたらし河にかけをうつつ」——秋夢集「かけきよきみたらしかは、秋のよの月さえ猶そすみまさりける」

詞一「かの揚玄琰のむすめをはしめてえ絵へりけむ皇帝の御心地」——俊頼髓脳「楊元琰といへる人のむすめ有りけり」

詞一「有為無常のなさけなきことほり」——信生法師集「有為無常のことほり」

詞二「階老同穴のちきり年月をかさねて」——撰集抄二「階老同穴の契こまやかに」

詞二「霊仏霊社へたてまつれり」——謡曲玉葛「霊仏霊社残りなく拌みめぐりて候」

謡曲花西行「都にて霊仏霊社をも拌み」

詞四「霓裳羽衣の舞たとへとするにあかさりしすかた」——白楽天、長恨歌「猶似霓裳羽衣舞」、唐物語下「霓裳羽衣の舞を奏せさせ給ふ」

詞四「東岱の雲とのほりぬるありさま」——妻鏡(無住)「労り来ては空く東岱の煙と登る」、肝心集「愛別離苦交東岱暮雲」(東ナラン)「東岱之雲下遙送忍辱之嚴親」、撰集抄六

「暁は東岱の雲にかくれ」、愚迷発心集「暁隠東岱之雲」、時宗浄業和讃「東岱前後のゆふけぶり、きのふもたなびきけふもたつ」、保元物語下「為義の北の方身を投げ給ふ事」(鳥部山、東黛前後の夕の煙)、「太平記十八(東官還御事、付一宮御息所事)」「共ニ東岱前後ノ烟ト立登リ」、易林「東岱前後煙、無常之義也」

詞五「あむしちをむすびて」——沙弥蓮愉集「あむしちにて」

詞五「十六想観おのつから心にうかみ」——散木奇歌集、釈教「観無量寿経文十六相観いらむとする目を見て」、前長門守時朝入京田舎打聞集「観経十六観の心をよみ侍ける中に」

詞六「九品の蓮台にむかへしめ給へ」——和漢朗詠集、仏事「九品蓮台間、雖下品底足」(極楽寺建立願文、慶保胤)、梁塵秘抄二、極楽哥「九品蓮台の間には、下品なりとも足んぬべし」

詞六「異香やうやく室ににほひ」——頼焼阿弥陀縁起絵巻、四「異香室にくんず」、沙石集、十末三「異香室ニ薫ズ」